

同志社大学経済学部 2016 年度秋学期特別講義「企業分析」

2016 年 11 月 18 日 「企業競争力～地方銀行～マイナス金利と地方銀行の収益力格差」

講師名 里村正治

学生のベスト・コメント



質問ですが、再生可能エネルギーは利益の高い有力な投資先だと考える理由を教えてくださいたいです。

自分はゼミで再生可能エネルギーの発展における金融機関の役割について調べており実際に銀行に話を聞くこともしましたが、その中で FIT 制度がありながらも新興事業ゆえのリスクの高さやノウハウ不足などの理由から投資には消極的であるという答えが多く、特に地方金融機関はその傾向が強くありました。

その傾向は再生可能エネルギーの盛んな東北でもそこまで大差はないと思っていますが、その中で地方金融機関である貴行が再生可能エネルギー事業に注力しようと思った理由を教えてくださいたいです。

感想については、自分はもう 4 年ですが地方金融系を志望していたので(内定先は違います)、お話の中で共感するところや新たに勉強になるところがたくさんあり素晴らしい時間でした。

講師からのコメント

- 金融機関の収益力格差はどこから生まれてくるのか？これが本日のメインテーマでした。高度成長期の護送船団方式の金融行政とは異なり、現在では各金融機関の主体的な経営努力を促し、競争力を高めさせようとする金融行政に変わってきております。
- やや中身に入った議論になりますが、「リスクを取るところに収益が付いてくる」という基本概念が、欧米と比べ日本の産業界、金融界、さらに加えれば学生の間にも欠けているところがあるように思います。一般的に蔓延している「リスクというのは、極小化すべきもの、それで収益を極大化する」という考え方では、決して企業の競争力強化には結びつかず、グローバルな競争下で自社の持続的な成長を果たすためには是非とも払拭しなければならない考え方です。
- お尋ねの再生可能エネルギーへの融資については、①風力、太陽光、バイオマス等、環境や自然を相手とする事業であること、②融資期間が一般の事業性貸出に比して期間が長いこと、③融資にあたってのリスクが多岐に亘っていること、④事業を担う会社が、地元企業に留まらず日本の大企業も加わることもあり、参加企業間の連携が重要であること等の要因から、その考え方が地方金融機関ごとに異なることが多いにあり得る状況です。
- フィデアグループとしても、再生エネルギー分野への融資は、長期のプロジェクトファイナンスになるケースが多く、慎重に多岐に亘るリスク分析をした上で融資の可否を判断しているところ です。
- 一方で、再生可能エネルギー分野は地方ならではの事業ですから、地方創生にも大きく関わり、これからの日本のエネルギー対策にも関係があることから、地方金融機関としては積極的に取り組む方針にあります。
- 追加説明になりますが、融資と投資は、全く別の概念です。この違いは、自分で勉強しておくことをお勧めいたします。

以上